

帰り入りて探り給ば 女君は

さながら臥して (もとのまま) 右近はかたはらに

うつ伏し臥したり。「こはなぞ

あなものの狂ほしのもの怖ぢや。(ああ 見苦しいほどの怖がりようだなあ) 荒れ

たる所は 狐などやうのもの

人おびやかさむとて (恐ろしく) け恐ろしう

思はするならむ まるあれば

さやうのものにはおどされじ。」とて

引き起し給ふ

「いとうたて乱り心地の悪しう侍れば

うつ伏し臥して侍るや。御前にこそ

わりなく思さるらめ。」と言は

「そよ (そうそよ 夕顔はどうしてこんなに恐れるのか) などかうは。」とてかい探り

給ふに息もせず。引き動かし給ど

なよなよとして (茫然としている様子) 我にもあらぬさま

なれば (たいそうひどく子供っぽい人なので) いといたく若びたる人にて

物にけどられぬるなめりと (物の怪に正気を奪われてしまつたようだ)

せむ方なき心地し給ふ。 (どうしようもない)

紙燭持て参れり。右近も動くへき

さまにもあらねば 近き御几帳を

引き寄せて「なほ持て参れ」と

のたまふ。例ならぬことにて

御前近くもえ参らぬづつましさに  
(遠慮深き)

長押にもえのぼらず。「なほ持て来や

所に(遠慮も場所次第だ)従ひてこそ。」とて 召し寄せて

見給ば ただこの枕上に夢に見え

つる容貌したる女 面影に見えて

ふと消え失せぬ

昔物語などにこそかかることは聞は

といとめづらかにむくつけけれど  
(たいそう意外で)

まづこの人いかになりぬるぞと

思ほす心騒ぎに 身の上も知られ

給はず添ひ臥して「やや。」と驚かし  
(おどおど)

給ど ただ冷えに冷え入りて

息はとく絶え果てにけり。

こそ——已然形。

⇓

むくつけし。】

】

言はむ方なし。(頼りになつてどうしたらよいかと)頼もしくいかにと

言ひふれ給ふべき人もなし。相談なされることができる人もいな

法師などをこそはかかる方の。(法師などこそこつう方面での)

頼もしきものには思すべけれど。頼りになるものとしてお思いになるはずだけれども

さこそ強がり給ど 若き御心にて

言ふかひなくなりぬるを見給ふに

やる方なくてつと抱きて。(つと亡骸を抱いて)

★「死ぬの隠語

「あが君 生き出で給、いとみじき(愛しい人よ)

目な見せ給ひそ。」とのたまど

冷え入りにたれば けはひもの疎く。(うす気味悪く)

なりゆく。なちてゆく 右近は ただあなむづかし

と思ひける心地みな覚めて

泣き惑ふさまいといみじ。

けはひ…】

むづかし…】

南殿の鬼のなにがしの大臣

おびやかしかける例を思し出でて

心強く「さりともいたづらになり

果て給はじ。夜の声は

おどろおどろし。(しじ、静かに)あなかま」と

諫め給ひていとあわたたしきに

(途方に暮れている気持ちがなきる)  
あきれたる心地し給ふ

おどろおどろし…】

あわたたし…】